

2026年1月11日 説教「木の回りを掘って」

ルカの福音書 13章 1～9節

久しぶりにルカの福音書の学びに戻ります。12章は59節に及ぶ章でした。その後半には、主の再臨を待つ信仰、忠実な賢い管理人のたとえなどを通して、今の時代を見据えることも教えられました。

1. 悔い改めべきことに気が付かない (1～3節)

①人々のイエスへの報告 (10)「イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。」

ある人の傍観的報告です。その内容は、ガリラヤ地方の愛国主義者たちが関連する事件のことなのです。彼らがいけにえをささげ、血を祭壇に注いだ時、ピラトの部下たちが彼らに襲いかかり、その時の流血がいけにえの血が混じったと言われています。報告者はガリラヤ人たちが受けた出来事に対して、罪深いと考えたのです。

②誰が罪人なのか (11)「すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。」

するとイエスはその批判的報告に対して、言われたのです。「あなたがたは、そのガリラヤ人たちの受けた災難の結果について、そのようなことに遭遇しなかったガリラヤ人と比べて、より罪深いことをしたと思うのですか」と言われました。

③誰でも悔い改めが必要 (12)「イエスは、その女を見て、呼び寄せ、『あなたの病気はいやされました。』と言って、」

イエスは、あるガリラヤ人たちを断罪的にいう人々に対して、「そうではない」と否定されました。つまり、イエスは罪のことを言うのであれば、「義人はいない一人もいない」(ローマ3:10)とあるように、そこに来た人々も含めて、同じように悔い改めていかねばならないのだとされるのです。そうでなければ、誰も同じように滅びを招くことになるといわれるのです。

2. 悔い改めるべきは自分自身 (4～5節)

①シロアムの塔が倒れ死んだ人々 (13)「手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。」

もう一つの例が出されます。こちらの事件はこんなものでした。それは、エルサレム南東のシロアムという場所にあった塔のことです。それが何らかのことで倒れてしまったのです。そして、その事故で18人が死亡したのです。イエスはこの時の出来事に絡んだ18人に何かの罪があったとしても、エルサレムに住んでいる他の人々よりも罪深いのかと問われます。

②悔い改めなければ滅びる (14)「すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、群衆に言った。『働いて良い日は六日です。その間に来て直してもらおうがよい。安息日には、いけないのです。』」

それに対し、イエスはその前の例証と同じように、「そうではない」と否定され、その事故の責任を言うよりも、自分自身の罪について思いをひそめ、

悔い改めていかなければ、皆が同じように滅びることになると教えられたのです。つまり、裁き主は公平に見ておられることが述べられているのです。

3. 憐み深い主を暗示するたとえ話 (6~9 節)

① イエスのたとえ話 (15) 「しかし、主は彼に答えて言われた。『偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどもき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。』」

二つの実例をあげた上で、イエスはたとえ話をされます。それは、一人のぶどう園の主人が、ぶどう園の中にいちじくの木を植えておいたというのです。いちじくには夏いちじくと、秋いちじくがありました。夏いちじくは 3~4月にかけて青い実をつけ6~7月には熟するのです。秋いちじくは8~9月にかけて、その年の新しい枝についた果実がつくものをいうのです。さて、この主人はいちじくの実を取りに来たのです。ところが、実は、まったくついていたのです。

② 実を結ばないいちじくの木 (16) 「この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけませんか。』」

そのぶどう園の主人はこれまでも相当にがまんしてきたようです。それはぶどう園の番人への言葉でわかります。「見なさい。三年もの間、何回もいちじくの実がなるのを楽しみにしてきたのに、まったく実がならないではないか。これだけ待ってだめなら、その場所を有効に使うために、その木を切り倒してしまいなさい。このままでは場所ふさがでしかないではないか。」などと、番人に厳しく言ったのです。

③ 一年の猶予を求めた番人 (17) 「こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざをよろこんだ。」

すると、その番人は答えます。「ご主人さま。申し訳けありません。どうか猶予をいただけませんか。一年間はそのままに続けさせてください。私としても、まずは木の回りを掘って、そこに肥料を入れてみるなど、できるだけやってみます。もし、それで来年に結実すれば何よりですし、もしそれでも実を結ばないなら、諦めます。どうかその時には切り倒してください。」と一年の容赦を願い出たのです。たとえ話はここまでなのです。

《展開と結論》

ここには、イエスに寄せられた報告に対して、イエスが見解を伝えられた上に、関連してかつての事件を取り上げながら、同じ主旨の教えをなさっています。そしてさらに、そのことを発展してたとえ話を用いて、教えておられるのです。

何らかの争いで生じた血がささげるいけにえに混ざったことが、それなりの罪であったとしても、他のガリラヤ人よりも罪深い人と断ずることはできないと主イエスは言われます。人間はすべからず罪人であり、それぞれがそ

の罪を悔い改めることがないなら、裁きを受け滅びることになると言われるのです。また、エルサレムのシロアムにある塔が倒れ落ちて死んだ18人のことについても、彼らに何らかの罪があったとしても、エルサレムの他の人々の罪も神の前には同等だと明言されるのです。悔い改めなければ、滅びるというのも同じお言葉でした。要するに、主イエスの目からみれば、人間の罪は神の前に、大小にかかわらず同じであり、悔い改めて赦されていくしかないのです。そうしてこそ、救いの道は備えられるのです。誰も自分の罪を棚上げすることはできないのです。

ここには、人間は神の前に立たせられる時のことが、たとえ話で教えられています。ぶどう園の主人と番人が出てきます。ところで、イザヤ書5章には、畑を掘り起こして、石を取り除き、良いぶどうを植えて、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた人のことが記されています。ところが、なんと酸いぶどうができてしまったというのです。ぶどう畑はイスラエルを意味するのですが、この出来事で悔い改めがないなら、主なる神はそこを荒れすたれるのに任せると言われています。ルカの福音書のたとえのなかでは、ぶどう畑に植えられたいちじくが実を実らないことに業を煮やした主人が、これを切り倒すと言われたのです。それを受けて番人は容赦を請うのです。そして、木の回りを掘って、肥やしを入れ、来年の結実を期すことを伝えたのです。それでなればよし、ならなければ木を切ってくださいというのですが、そこで話は終わっているのです。このたとえをどのように理解すれば良いのでしょうか。

番人は一年の猶予をもらい、できる限りのことをして、あとは主の憐みによりすがるしかないと考えました。これは人間の救いのことに関係があります。ローマ人への手紙9章16節にこうあります。「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」。結局、救いは主の御手のなかにあるというのです。憐みを願うという姿勢です。

これから歌う讚美歌511番をご覧ください。「み赦しあらずば滅ぶべきこの身。わが主よ憐み救いたまえ」「罪のみつもりて、功はなけれど、なお主の血により救いたまえ。」「み恵み受くべき身にしあらねども、ただ御名のために救いたまえ」「イエスキミよ、このままに、我をこのままに救いたまえ」とただ憐みを願う歌詞です。ダニエル書9章9節には「あわれみと赦しとは、わたくしたちの神、主のものです。」ともあります。もともと、私たちの救いはただ恵みにより、信仰によって与えられたものです。行いによるものではありません。(エペソ2:8~9)。だとすれば、私たち主の憐みによりすがっていくしかありません。そして、この番人がいちじくの実がなることを願うように、私たちも主の憐みに期待し、主を見上げながら歩いていきましょう。